

## 「山村再生担い手づくり事例集(山部会 WG)」について

2017.7.18 豊田市矢作川研究所 洲崎作成

### 【山村再生担い手づくり事例集づくりの目的】

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。

解決の糸口として 2013 (H25) 年度から、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を毎年作成しています。

### 【取材項目】

取材先団体基本データ

活動内容

キャッチフレーズ

「地産地消で生涯現役！」(ねば杉っ子餅、2014 年)

「軽トラとチェーンソーで晩酌を」(旭木の駅プロジェクト、2014 年)

「まちの中の結(ゆい)」(green maman、2014 年)

「村のおじいの心と体を暖める」(木の駅ねばりん実行委員会、2015 年)

「宿泊客と地域の架け橋に」(あすけ里山ユースホテル、2015 年)

「種まきからキッチンまで」(佐久島 Oyaoya café もんぺまるけ、2015 年)

「ちいさなようちえん おおきなぞく」(野外保育とよた 森のたまご、2016 年)

「気持ちを言葉で伝えて、田舎を居心地の良い所にしていこう」

(山里センチメンツ、2016 年)

「(旧) 鳥川小学校がある限り、コミュニティは永遠に不滅です！！！」

(鳥川ホテル保存会、2016 年)

会のモットー

設立から現在に至るまで変化したこと

連携している団体・専門家・自治体など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

現在直面している課題

今後やってみたいこと

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

チームオリジナルの質問



### 【いい取材をするための心得、ポイントなど】

「話し上手より聞き上手になれ。人の聞き落としした話を聞き出せ。人生は落ち穂拾いでいいんだ」(民俗学者、宮本常一の言葉)

いい取材者は、良質なセラピストである。

インターネットで調べても出てこない、直接対面して話を聞いて初めてわかることを記録する。

活動現場に近いところで話を聞く。

語り手の光(自慢)と影(苦悩)について聞く。

想像や思い込み、先入観を廃して話を聞く。

向こうが話したいこととこちらが聞きたいことは必ず違う。子どものように何で? と聞くのが大事。その意味でも立場が違う人同士が組んで取材するといいい。

聞き手と話し手ではなく対等な人間関係になること、雑談が大事。

聞く過程が重要なので、客観性やレポートの出来不出来にはそれほどこだわらなくてもいい。

### 【事例集づくりの年間作業工程】

- ・取材先のピックアップ、確定  
(取材先には事例集事務局が取材対応の承諾を得る)
- ・取材者の募集(流域圏懇談会メーリングリスト、事例集メーリングリスト、その他  
関心を持ちそうな人への呼びかけ)
- ・取材先と取材者のマッチング(事例集事務局)  
取材者は事例集メーリングリスト等で取材同行者を募り、取材先と日程調整して  
取材日を決める
- ・取材(秋～冬)
- ・レポート執筆、編集委員会の実施  
事前検討会、中間報告会、振り返りの会  
取材者が他の事例集メンバーからの指摘を受け、レポートをブラッシュアップする  
貴重な集まり
- ・レポートの完成と提出
- ・事例集の完成(～全体会議)

### 【2017年度の計画】

2013～15年度は、川や海の活動団体も一部含まれてはいるものの、基本的に中山間地で活動する団体や、都市で山村再生に関わる活動を対象に取材を行ってきた(2016年度は2013年度に取材した団体への再取材を実施)。

これまでに取材を行った川の活動団体  
NPO 法人矢作川森林塾、矢作川水族館（以上 2015 年）、有間竹林愛護会、鳥川  
ホタル保存会（以上 2016 年）

2017 年度は取材者、取材先とも川や海の関係者を増やし、「流域再生担い手づくり事例集」の作成をめざす。またこの活動を山部会だけのものとせず、部会間連携活動の一環とする。

#### 【川部会の皆さんへのご参加の呼びかけ】

事例集の取材やレポート書きは一見大変そうですが、いざ実施してみると取材そのものも、取材後の編集会議での意見交換も、予想以上に愉しく刺激的でした。また、事例集づくりがきっかけとなり、取材者と取材先、取材先と懇談会、取材者と懇談会の新しい交流が始まっています。

矢作川流域内では、地域の自然をよりよい状態にして、地域を元気にしようと、ユニークな活動をしている人たちがたくさんいます。その志に触れることは、私たち自身が矢作川と地域をよりよいものにしようと活動するモチベーションを高めてくれます。

私たち山部会メンバーと一緒に、1 冊目の「流域再生担い手づくり事例集」を作りましょう！



# 山村再生 担い手づくり事例集

～流域を元気にする仕掛け人たち～ 洲崎 燈子

## 事例集のあらまし

先月(2016年3月)、「山村再生担い手づくり事例集Ⅲ」が刊行されました。作成したのは、2010年に国交省豊橋河川事務所が、民・学・官の連携・協働による流域圏全体の発展をめざして立ち上げた「矢作川流域圏懇談会」の山部会です。この懇談会は山、川、海の3部会で構成されており、山部会は流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。このうち水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。この問題の解決をめざし、2013年度に、矢作川流域で中山間地の振興に携わる団体を取



山村再生担い手づくり事例集 第1～3集

材し、その記録をまとめた事例集の作成を始めました。毎年、懇談会メンバーを中心とした20人強の取材者が2～3人のチームに分かれ、合計20以上の団体を取材し、1冊の冊子にまとめてきました。取材先にはまちながでの活動を通じて中山間地の支援を行うグループも加えました。また2014年度以降は、川と海の活動団体も取材対象としました。

## 取材にあたって大切にしたこと

この事例集の取材方法は、2008年に環境省中部地方環境事務所が始めた、生物多様性保全活動団体への取材方法を受け継いでいます。その基本方針は「インターネットで拾える情報ではなく、現場に出向いてじっくり話を聞き、その成果を記録する」「取材先の自慢話だけではなく悩んでいる部分、いわば“光と影”を記録する」「話を聞く過程を大事にする」といったことです。物書きのプロではない取材者たちは取材先とやりとりを重ね、編集会議でお互いのレポートについて意見を出しあい、一生懸命最終稿をまとめました。その結果3年間で、心のこもった64篇の取材記録がまとまりました。



取材風景

奥矢作森林塾(岐阜県恵那市)



first-hand(愛知県豊田市)



佐久島Oyaoya cafeもんべまるけ  
(愛知県西尾市)

## 新しい交流の芽吹き

取材を通じて、実にさまざまなことがわかりました。たとえば高齢者の皆さんが独創的かつパワフルな活動を展開している長野県根羽村、地域愛に裏付けられた活動が浸透している岐阜県恵那市、多数の若者がターンし、きわめて多数の多様な活動が生まれている愛知県豊田市、長い林業の歴史に支えられている愛知県岡崎市といった地域特性です。また、取材を受けた方が翌年取材者として参加したり、懇談会のメンバーになったり、取材者と取材先が意気投合してコラボレーション企画が生まれたりといった、新しい交流も生まれました。川と海の関係者が取材者と取材先の双方に加わったことで、懇談会で課題となっている部会間の連携を強化することにもつながりました。

3冊の「山村再生担い手づくり事例集」には、持続可能で魅力的な流域づくりのヒントと、老若男女、多様な人びとの「人生をもっと幸せに生きるための言葉」が詰まっています。豊橋河川事務所のホームページで見られますので、ぜひご覧ください。

(すぎき とうこ、主任研究員)

# 楽しみながらいい地域と、 いい川をつくらう

近藤 朗

「山村再生担い手づくり事例集調査」の母体となったのは、伊勢・三河湾「流域圏再生プロジェクト調査」で、これは、生物多様性条約締約国会議COP10(2010年)に向けた市民団体活動調査でした。この調査(2008~2010年度)では、想像以上に様々な繋がりがありました。特に今まで希薄だった愛知・岐阜・三重県間の交流が進み、後に3県連携による「22世紀の奈佐の浜プロジェクト(2012年~鳥羽市答志島海岸清掃)」その他へと発展していきました。

## 流域圏再生プロジェクト調査の系譜(2008~2015年度)

	実施時期	調査団体	内容・テーマなど
I	2008~2010年度 伊勢・三河湾流域圏再生調査 (環境省委託、助成事業)	72団体	愛知・岐阜・三重／山・川・里・海 2009年度「営み」の視点を重要なテーマに 2010年度 揖斐・長良川流域での地域再生、山村担い手
II	2011~2015年度(継続中) 22世紀の奈佐の浜プロジェクト (自主事業で流域圏調査継続)	50団体以上 (活動参加)	2011年度 愛知・岐阜・三重県追跡調査、各県連携会議 2012年度 奈佐の浜海岸清掃 スタート 2013年度 3県流域エクスカージョン スタート
III	2013~2015年度(継続中) 山村再生担い手づくり事例集調査 矢作川流域圏懇談会 山部会	64団体	2010年度 矢作川流域圏懇談会 開始 2013年度 山村再生担い手づくり事例集調査 スタート 2014年度~ 川、海も含めた調査に

事例集調査には3年通じて参加しましたが、今年度の調査では新たな伝説が生まれました。長くこの調査に関わっている私でも、これほど壮絶で抱腹絶倒な取材は経験したことがない!根羽村の幻の演芸集団「天下杉」との出会いです。

取材は丸一日に及び、売木村での慰問活動の見学から、取材と称する夜の宴会まで、圧倒され続けました。これほどのた打ち回って床を叩きながら笑ったのは、いつ以来か?「自分たちが楽しまなければ、人を喜ばせられない」という自信に満ちた言葉は、山村再生の重要なキーワードですね。平均年齢が75才を越えたという彼女たち、後日メンバーの一人が仕事として高齢者福祉施設で、自分より若い方の介護を元気にされているのを見た時に、担い手とは何かを十分に思い知らされました。

健全な流域圏をめざすにしろ、山村再生にしろ、重要なのは人が中心であること。持続可能な営み、自立による地域再生と、そこでの人材(担い手)育成が大きなテーマとなります。それは環境保全とも密接に繋がっています。しかしその認識、危機感、実は都市と地域で大きなギャップがあります。都市住民の役割は、地方の危機感を真摯に受けとめ、支えていくことにあると感じています。

私が本業としている川づくりにおいても、「川と人との繋がりが損なわれたことにより、様々な問題が生じた。今こそ、川と地域の関係を再構築しなければならない」と提言(1999年、河川審議会)されて久しいです。その様な意味では、最近になって市民工事による「小さな自然再生」という取り組みも始まっており、事例集に掲載された矢作川森林整の河畔林整備や家下川周辺での水路再生工事(矢作川水族館など)も、その先駆者と言えます。

多自然川づくりも、今の課題はむしろ管理者の人材育成と継続的なシステムづくりへと移行しており、担い手づくりと地域再生は共通のテーマだとわかります。こちらも大事なのは、「自分たちが楽しまなければ、いい川はできない」ですね。

(こんどう あきら、伊勢・三河湾再生交流会議)



22世紀の奈佐の浜プロジェクト



天下杉の皆さん